

世界史A教科書の比較研究

— 前近代史の構成を中心に —

有 田 嘉 伸*

(平成10年10月31日受理)

A Study on the Structure of "World History A" Text Book of High School

Yoshinobu ARITA

(Received October 31,1998)

1 はじめに

平成元年の学習指導要領の改訂によって、高等学校の社会科は地理歴史科と公民科に再編された。地理歴史科のなかで行われるようになった世界史は、世界史A(2単位)と世界史B(4単位)の2科目が設けられるとともに、「国際化の進展に対応」するため、世界史Aまたは世界史Bのいずれかを必ず履修すること(必修)とされた。世界史Bは、それまでの社会科「世界史」をほぼ踏襲し、古代史から近現代史までを満遍なく通史的に学習するのに対し、世界史Aは近現代史を中心に内容が構成された「新科目」であり、特に、前近代史の構成に目新しさがある。本稿では、世界史Aの構成上の特色を、学習指導要領および『学習指導要領解説』によって分析するとともに、それに基づいて発行された世界史A教科書(平成7年発行、全9種)における前近代史の構成や扱い方を比較検討する⁽¹⁾。

2 世界史Aの基本的性格

(1) 世界史Aの「目標」

世界史Aの科目の「目標」は次の通りである。

現代世界の形成と歴史的過程について、近現代史を中心に理解させ、世界諸国相互の関連を多角的に考察させることによって、歴史的思考力を培い、国際社会に生きる日本人としての自覚と資質を養う。

* 長崎大学教育学部社会科教育研究室

これを世界史 B の「目標」と比べると、「歴史的思考力を培い、国際社会に生きる日本人としての自覚と資質を養う」という「能力・態度目標」は共通するが、学習内容にかかわる「中核的ねらい」と、「学習の展開、方法にかかわるねらい」に違いがある。「中核的ねらい」を「現代世界の形成と歴史的過程について、近現代史を中心に理解させ」としている世界史 A に対し、世界史 B は「現代世界の形成の過程と世界の歴史における各文化圏の特色について理解させ」るのである。また、「学習の展開、方法にかかわるねらい」も、世界史 A が「世界諸国相互の関連を多角的に考察させる」のに対し、世界史 B は「文化の多様性・複合性や相互交流を広い視野から考察させる」ことによるとしている。

(2) 世界史 A の「内容」

次に、世界史 A の「内容」を、世界史 B のそれと対照して、大項目、中項目（一部略）のみ引用すると次の通りである。

世 界 史 A	世 界 史 B
(1) 諸文明の歴史的特質 ア 文明と風土 イ 東アジアと中国文化 ウ 南アジアとインド文化 エ 西アジアとイスラム文化 オ ヨーロッパとキリスト教文化	(1) 文明のおこり ア オリент文明 イ 地中海文明 ウ インド文明 エ 中国文明
(2) 諸文明の接触と交流 ア 2世紀の世界 イ 8世紀の世界 ウ 13世紀の世界 エ 16世紀の世界 オ 17・18世紀の世界	(2) 東アジア文化圏の形成と発展 (3) 西アジア・南アジアの文化圏と東西交流 (4) ヨーロッパ文化圏の形成と発展 (5) 近代と世界の変容 ア 市民革命と産業革命 イ アメリカ合衆国とアメリカ文明 ウ アジア諸国とヨーロッパの進出 エ 帝国主義とアジア・アフリカ
(3) 19世紀の世界の形成と展開 ア 19世紀のヨーロッパ・アメリカ イ 産業革命と世界市場の形成 ウ アジア諸国の変質と日本	(6) 20世紀の世界 ア 二つの大戦と世界 イ ソビエト連邦と社会主義諸国 ウ アメリカ合衆国と自由主義諸国 エ アジア・アフリカ諸国の民族運動と独立
(4) 現代世界と日本 ア 二つの世界大戦と平和 イ アメリカ合衆国とソビエト連邦 ウ 民族主義とアジア・アフリカ諸国 エ 地域紛争と国際社会 オ 科学技術と現代文明 カ これからの世界	(7) 現代の課題 ア 国際対立と国際協調 イ 科学技術の発展と現代文明 ウ これからの世界と日本

世界史Aの大項目四つのうち、(1) (2)が前近代史に、(3) (4)が近現代史にあたる。世界史Aが近現代史を重視するとしながら、近現代史の内容構成は世界史Bとそれほど大きく変わるものではない。ユニークな内容構成の特色は、(1) (2)の前近代史にある。

(3) 世界史Aにおける前近代史の扱い方

世界史Aは近現代史を中心に構成されているが、中学校の社会科歴史的分野では、世界の歴史の大きな流れを、全体としてまとまった形では取り扱っていないため、世界史Aを学ぶ場合にも、近現代史を学ぶ前段として、前近代史の大きな枠組みを学習させる必要がある。そのため、前近代史については、内容の徹底した精選、集約化、重点化が必要である。また、前近代史の学習は、世界の歴史に対する興味・関心を高め、歴史的な思考法になじませ、世界の歴史をとらえる視点などを考察させることもねらいとしている。

まず、「(1) 諸文明の歴史的特質」は、「近現代の世界が形成される過程において、世界各地で成立し発展した諸文明について、それぞれの特質を大局的にとらえさせ、それらが、今日の世界諸地域における社会・文化の重要な基盤になっていることを理解させる」（『解説』p. 16）ことをねらいとするもので、昭和45年版学習指導要領以来、世界史の前近代の構成方法として採用されてきた「文化圏学習」を世界史Aでも採用したのと同じと考えることができる。⁽²⁾

ただし、世界史Aでは、世界史Bのように「文化圏」の用語を用いず、「文明」や「文化」の語を用いている。また、世界史Bの「文化圏学習」の解説には、その趣旨や「文化圏」の定義も記されているが、世界史Aの『解説』には「文明」や「文化」の定義は記されていない。文明史的視点を採用する趣旨については、「価値観、思想、イデオロギー、生活様式などあらゆるものが変化し、国家や国民という枠をこえて、地球的または人類的な規模の課題の解決が要求されつつある現代において、文明という視点から、歴史を考察させるようにした」（『解説』p. 14）と述べている。

それでは、世界史Aの文明史的把握と、世界史Bの「文化圏学習」は全く同じであろうか。学習指導要領では、世界史Aの「(1) 諸文明の歴史的特質」を次のように説明している。すなわち、「文明の成立とその発展、世界諸地域の文化的特質を理解させる。その際、諸地域の歴史・文化の基盤となっている風土、民族、言語、宗教などに着目させる。」（『解説』p. 16）と。

「風土、民族、言語、宗教」の観点から文明の特質を把握させる方法は、世界史Bの「文化圏学習」とも共通する。世界史Bの『解説』では、「文化圏とは地域性及び歴史性によって培われた共通文化要素をもつ空間領域で言語、宗教、政治、経済及び生活様式などの面でのある種の地域的なまとまりの総称であり、気象、地形など自然条件もその主要な規定要素としてこれに加える」（『解説』p. 84）と述べているからである。

それでは、実際に世界史Aで「(1) 諸文明の歴史的特質」をどのように扱うことができるだろうか。世界史Aで「(1) 諸文明の歴史的特質」を扱える時間は、総授業時数の四分の一程度の15時間前後しかないことを考えると、それぞれの地域（文明・文化）を扱う時間は3～4時間程度になる。これでは、世界史Bで行われているような、「通史を基本とした文化圏学習」を行うことはできず、必然的に諸文明の構造的な特色を中心とした、テーマ（主題）的な扱いにならざるをえない。原田智仁氏はそれを「構造的な主題学習」といって

いるが、⁽³⁾ 文化圏は構造史的に扱ってこそ、「文化圏学習」本来の目的を達成できるのである。

次に、「(2) 諸文明の接触と交流」は、「歴史の学習の中で異文化の理解を通して、相対的にもものごとを見る目を養い、柔軟な歴史的思考力を培うことをめざした」（『解説』 p. 14）もので、「諸文明の接触と交流の歴史を中心に各時代の特色を世界的視野で把握させる。また同時代の諸地域の文化を比較させ、文化・文明に対する多様なものの見方を養う」（『解説』 p. 84）のである。すなわち、世界の歴史を横断的にとらえ、同時代史として扱うのである。具体的には、「文明の接触・交流に伴う民族や人口の移動、諸地域の民族構成の変化、物の交流や伝播、言語の広がり、文化の変容」などを取り扱うことになる。しかも、内容(2)に示された2世紀、8世紀、13世紀、16世紀、17・18世紀のすべてを取り扱う必要はなく、それらの中から二つ程度を扱えばよいという「科目内選択」が導入されたのである。しかし、教科書の記述はどうなるであろうか。五つのうち、二つの世紀しか記述していない教科書が出されるであろうか。さらに実際の授業ではどのように扱われるであろうか。『解説』では、(2)においても、「シルクロードの交易」（2世紀）、「各文化圏の主要都市」（8世紀）、「イブン=バトゥータの世界旅行」（13世紀）、「コロンブスの航海」（15・16世紀）などのテーマを設け、同時代史もテーマ（主題）学習的に行うことをすすめている（『解説』 p. 27）。

この結果、内容の(1)(2)の前近代史は、世界の歴史の縦の流れに、諸文明の接触・交流の横の関連を組み入れ、多彩な「テーマ（主題）学習の束」を構成することになる。しかし、(2)の「諸文明の接触と交流」において「移動、征服、交易、宣教」などを行うのは人間であるから、同時代史は「いつ、どこで、だれ（個人・民族）が、何を、どうした」というかたちの事件史として取り扱われることも多いであろう。その結果、前近代史は、文明の歴史的特色を構造史的に把握させた上で、同時代の諸文明の接触・交流の様子を事件史的にとらえさせるといふ、「構造史と事件史の組み合わせ」の構造になっているという解釈もできるであろう。⁽⁴⁾

3 世界史 A 教科書の比較検討

(1) 世界史 A 教科書の構成

平成元年版学習指導要領に基づいて出版された世界史 A の教科書は9種ある。⁽⁵⁾ これらの教科書は、世界史 B 教科書とは違って、基本的に新しく編集されたもので、それぞれに特色あるものが多い。川口靖夫氏の検討をふまえて、各教科書の大項目別の記述ページと全ページに占める割合を表にすれば、表1のようになる。⁽⁶⁾ また、前近代史の構成と記述の順序を図示すれば図1のようになる。

まず全体的特色として、9種中8種まで、判型がB5判からA5判へと大型化され、口絵や図版が大きく、見易くなっている。表1により、大項目(1)(2)の前近代史と、(3)(4)の近現代史の記述量を比較すれば、当然近現代史の記述が多くなっている。最も多いのは(A)の72.8%、最も少ないのは(I)の56.4%で、教科書によってかなり幅がある。9種の平均は64.7%で、これを、世界史 B の内容「(5) 近代と世界の変容」以降を近現代史と考えると、世界史 B 教科書における近現代史の記述量の平均を計算すると、44.3%であり、⁽⁷⁾ 世界史 A 教科書における近現代史重視の実態がうかがえる。

表1 世界史A教科書の大項目別記述量と本文に占める割合（上段：頁数／下段：割合％）

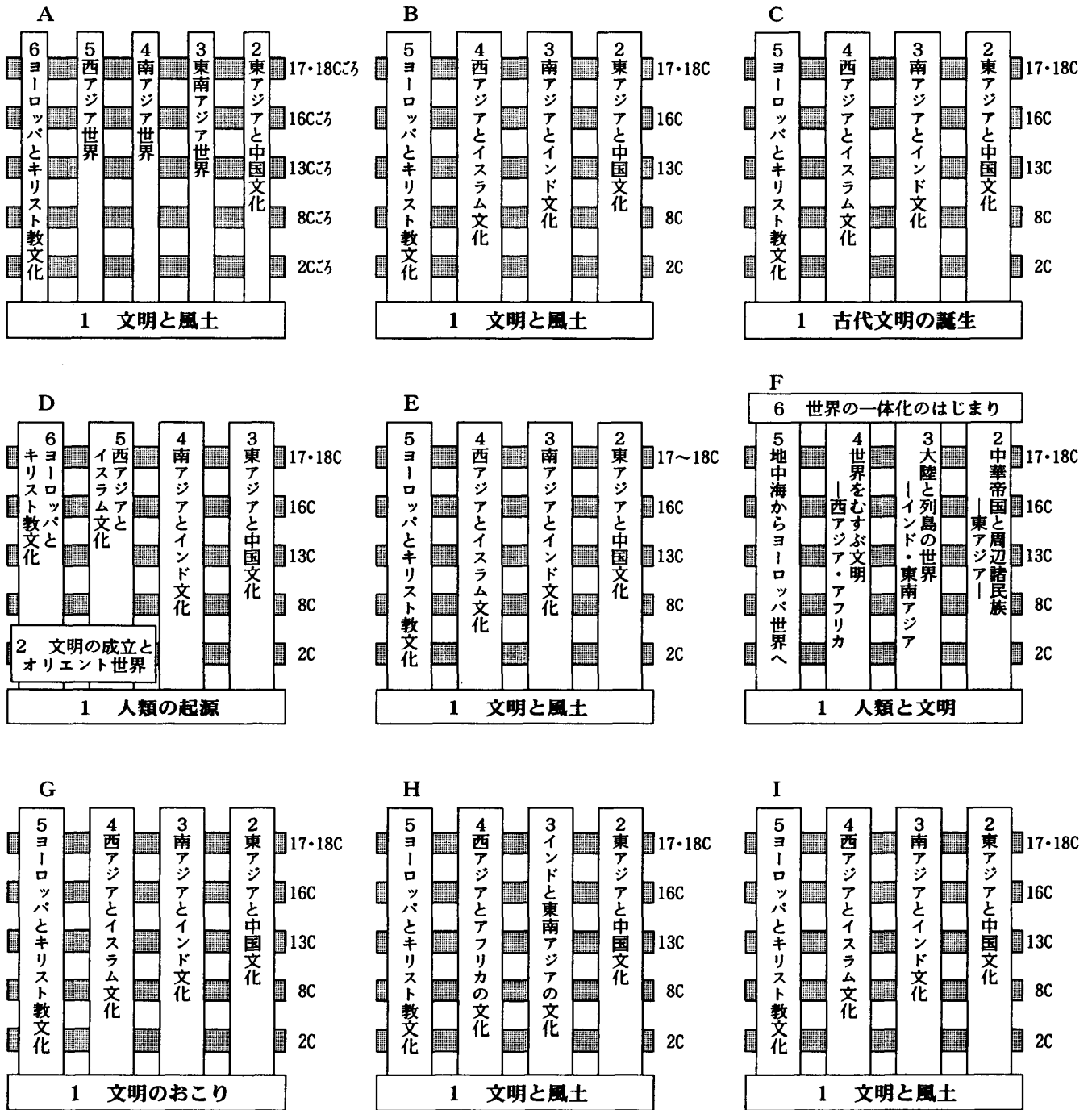
	判型・字数・ 組み方	本 文 総 頁	(1)	(2)	(1)+(2) 前近代	(3)	(4)	(3)+(4) 近現代
A	B5・30字1段	195	43 (22.1)	10 (5.1)	53 (27.2)	89 (45.6)	53 (27.2)	142 (72.8)
B	B5・30字1段	182	36 (19.8)	18 (9.9)	54 (29.7)	52 (28.6)	76 (41.8)	128 (70.3)
C	B5・20字1段 30字1段	184	30 (16.3)	32 (17.4)	62 (33.7)	50 (27.2)	72 (39.1)	122 (66.3)
D	B5・20字1段	178	19 (10.7)	51 (28.7)	70 (39.3)	50 (28.1)	58 (32.6)	108 (60.7)
E	B5・31字1段	176	26 (14.8)	50 (28.4)	76 (43.2)	42 (23.9)	58 (33.0)	100 (56.8)
F	B5・31字1段	179	34 (19.0)	26 (14.5)	60 (33.5)	60 (33.5)	59 (33.0)	119 (66.5)
G	A5・30字1段	198	43 (21.7)	25 (12.6)	68 (34.3)	70 (35.4)	60 (30.3)	130 (65.7)
H	B5・31字1段	182	40 (22.0)	20 (11.0)	60 (33.0)	54 (29.7)	68 (37.4)	122 (67.0)
I	B5・33字1段	165	30 (18.2)	42 (25.5)	72 (43.6)	46 (27.9)	47 (28.5)	93 (56.4)

では、前近代史の記述はどうなっているか。記述量が最も多いのは（I）の43.6％、最も少ないのは（A）の27.2％で、9種の平均は35.3％となっている。前近代史の記述の方法として、「(1) 諸文明の歴史的特質」と「(2) 諸文明の接触と交流」のどちらに重点を置くかということが考えられる。(1)に重点を置いている教科書が（A）（B）（F）（G）（H）であるのに対し、(2)に重点を置いているのが（D）（E）（I）である。また、（C）はほぼ同じ記述量となっている。9種の平均は、(1)が18.3％、(2)が17.0％で、全教科書をならしてみると(1)(2)の記述はほぼ同じ量となっていることがわかる。

(2) 「(1) 諸文明の歴史的特質」の取り扱い

次に、図1及び教科書の実際の記述内容を比較して、各教科書の前近代史記述の特色を見ることにする。まず大項目(1)において、いくつの地域（文明・文化）を設定すべきかが問題となるが、9種中7種までは、学習指導要領そのままの四つの地域（文明・文化）を設定しているのに対し、（A）は「東南アジア世界」を独立させて五つの地域（文明・文化）を設定し、（D）は「文明の成立とオリエント世界」を独立した扱いにしている。また、（F）（H）は「インドと東南アジア」の地域（文明・文化）を設定するとともに、「アフリカ」の扱いにも配慮し、これを「西アジア」と一体化した扱いにしてタイトルに明示している。もっとも、章や節のタイトルに「東南アジア」の文字が記されてなくても、（B）（C）（D）（E）（G）（I）のいずれの教科書も、「南アジア」のところで「東南アジア」についても触れている。しかし、アフリカの文明・文化については、（F）（H）以外の教科書は触れていない。限られたページ数の中では、独立的な扱いは無理としても、どこかでアフリ

図1 世界史A教科書の前近代史の構成と記述の順序



カの文化・文明の独自性について触れることは必要であろう。各地域（文明・文化）の記述の順序は、学習指導要領の中項目の順序通りであり、独自の工夫をした教科書は一種もない。

中項目の最初の「文明と風土」の扱いは、学習指導要領通り「文明と風土」としているものが5種（A・B・E・H・D）で、4種は「文明の誕生（おこり）」（C・G）, 「人類の

起源」(D)、「人類と文明」(F)など別のタイトルを用いている。ここでは、人類の発生から古代文明の成立までの記述が中心となるが、「風土」が文化(文明)の成立にもつ意義について、まとめて論じているのは(E)のみである。また、(H)は、風土論は展開していないが、農業(作物により異なる)・遊牧・漁業など主たる生業の違いにより異なる文化(文明)が生まれたことを体系的に述べている。学習指導要領に従えば、「古代オリエント」や古代ギリシア・ローマなどの「地中海文明」も、この中項目で取り扱われることになるが、「文明と風土」の項で「古代オリエント」「地中海文明」の両文明とも扱っているのは、(C)(I)のみである。(D)(E)は「古代オリエント」のみをこの項で扱っている。他の5種(A・B・F・G・H)は「西アジア」の最初のところで「オリエント」を扱っている。「地中海文明」については、(C)(I)以外の7種の教科書がヨーロッパのところで扱っている。

各地域(文明・文化)の扱いは、地域(文明・文化)の構造的な特色を中心としたテーマ(主題)的取り扱いにならざるを得ないと述べたが、実際に教科書の記述はどうなっているであろうか。ページ数の制約から、テーマ的な記述がなされている教科書が多いが、「通史を基本とした文化圏学習」の域を脱却できていないものもある。

「東アジアと中国文化」では、農耕民と遊牧民の相互依存と抗争、冊封体制、律令制、皇帝支配と官僚制、漢字、仏教、儒教などがこの地域や文化(文明)の構造を作り上げた要素として考えられるが、(C)(D)(E)(H)(I)などは、これらを軸にテーマ的に記述されている。また、これまで、世界史Bの「文化圏学習」においては、文化圏の下限をどこまでにするかが議論になってきたが、世界史Aにおける地域(文明・文化)は、テーマ的に記述されているものが多く、その場合は、各地域(文明・文化)についての記述の下限も、年代史的にどの時代までと確定しにくい。(B)(F)(G)などのように「通史を基本とした文化圏学習」の記述を継承しているものは、下限を18世紀の清まで記述しているが、通史を基本にすえていない(C)(D)(E)(H)(I)は、扱うテーマによって時代の下限は一定していない。なお、(A)は、限られたページの中で、通史とテーマ史を併記する形式をとっており、通史の中では清までを扱っている。

「南アジアとインド文化」では、バラモン教・仏教・ヒンドゥー教・イスラム教などの多様な宗教、カースト(ヴァルナ)制などを軸に記されている。下限については、通史的記述をしていないものでも、イスラム化したムガル帝国時代のことまで触れているものがほとんどである(A・B・C・D・E・G・H・I)。

「西アジアとイスラム文化」では、5種の教科書が「オリエント」についての記述から始まり、イスラム教の成立、イスラム帝国の成立から発展へと記述されている。通史的記述を残した(A)(B)(G)やテーマ的記述の(H)は、記述の下限をオスマン帝国の時代までとしているが、イスラム教の教義やムスリムの生活、世界の諸文化を融合したイスラム文化、世界を舞台にした商業活動などのテーマを軸に記した(C)(D)(E)(F)(I)では、下限がイスラム帝国時代までとなっている。

「ヨーロッパとキリスト教文化」では、7種の教科書(A・B・D・E・F・G・H)が、地域としての「ヨーロッパ」に比重を置いて、古代ギリシア・ローマの「地中海文明」から記述している。そして、(C)(I)のみが、いわゆる中世ヨーロッパを、「ヨーロッパ世界」の成立と考え、地中海世界の分裂後の、東・西ヨーロッパ世界の成立から記述してい

る。ヨーロッパ世界を特色づける要素としては、ギリシア・ローマの古典文化とキリスト教、ローマ＝ゲルマン的西ヨーロッパとギリシア＝スラヴ＝アジア的東ヨーロッパの併存、封建制度、都市と農村の社会と文化、国民国家の形成と資本主義の発達、合理主義と科学・技術の発達などが考えられるが、他の地域とは違って時代や地方（国家）によって多様性が見られ、構造的にまとまったらえ方が困難である。教科書の記述も、他の地域にくらべて、最も「通史を基本とした文化圏学習」の域を脱却できていない。

(A)は通史的に18世紀までをたどり、テーマとして「ヨーロッパ中世の都市と農村」「キリスト教の多面性」を設けている。(B)は通史的に15世紀まで記している。(C)は大まかに20世紀までをたどっている。(D)(E)も大まかに17世紀までの動きを記している。

(F)は通史的に15世紀ころまでを記し、そのあと、他の教科書にはない「世界の一体化のはじまり」の章を設け、ヨーロッパの18世紀まで、西アジアの13～18世紀、南アジアのムガル帝国、東アジアの明・清時代について記している。(G)は通史的に18世紀までをたどっている。(H)は通史的記述を完全に脱却して、「キリスト教の人間観・自然観」「自己主張の文化」「ロシアの村落社会とギリシア正教信仰」などのテーマで記述している。

(I)も通史的色彩はうすく、主としてルネサンス時代ころまでをキリスト教や都市などに焦点を当てて記述している。

(3) 「(2) 諸文明の接触と交流」の取り扱い

大項目(2)では、学習指導要領には、2世紀の世界、8世紀の世界、13世紀の世界、16世紀の世界、17・18世紀の世界の五つが例示してある。これらの時代は、諸文明の成長期ないし成熟期で、比較的活発な交流が行われた。また、日本と世界のつながりが見出し易い時代でもある。学習指導要領では、これらのすべてを取り扱う必要はなく、二つ程度の世紀を取り上げ、諸文明の接触・交流の様相を学習させることとしている。また、諸文明の接触・交流はこの世紀以外にもあったのであり、考え方によっては、さらに多くの世紀を取り上げてよいであろう。しかし、結果的には、教科書においては、すべてのものが、この例示された世紀についてのみ、この時代の順番に記しており、それより少ないものも、多いものもない。

教科書の記述をみると、各世紀を2ページでまとめている(A)(B)や、4ページでまとめている(G)(H)から、10ページを使って記している(D)(E)など様々である。ページ数の少ないものは、事件を中心としたその世紀の概観だけに終わらざるを得ないが、ある程度ページ数をさいて記せば、いろいろな工夫をすることができる。例えば、(D)は、世紀の概観(文章と地図)、小テーマ(三つ程度)、コラム(「ガンダーラの仏像」「十字軍」「茶の歴史」など三つ程度)で構成しているし、(E)は、「〇〇世紀に登場する国々」、小テーマ(三つ程度)、コラム(「物を通して見る〇〇世紀」)、それに「〇〇世紀の世界学習のまとめ」(地図、略年表、ドリルと作業課題など)で構成している。

しかし、概して各教科書が記している内容は、共通している点が多い。すなわち、どの世紀においても、その時代を代表する国々の動向、ひとや文物の移動、征服、交流などが事件史として記されている。

4 おわりに

新教科の教科書を編集することは、モデルがないために、苦勞が多い。しかし、長い歴史や伝統がないために、逆に思い切った試みをすることも可能である。世界史A教科書には、これまで記してきたこと以外にも、様々な工夫がみられる。たとえば、①見開き2ページで1テーマを記述したもの(A・E・H)、②本文余白や章末に学習課題を記したもの(A・E)、③活字の組み方を前近代と近現代で変えたもの(C)、④本文中に史料を枠組みにして入れたもの(C)、⑤「学習のまとめ」のページを設け、その中に地図、年表、作業課題、事項の書き込み欄などを設けたもの(E)、⑥煩雑になる脚注を設けず、本文と図版だけで構成したもの(D)、⑦イラスト風の図版を多用し、生徒の興味関心を喚起しようとしたもの(I)、⑧欄外に「人物紹介」や「現代を見る目」「世界のなかの日本」などのコラムを設けたもの(E)、⑨脚注をを本文の左右に置き、見易くしたもの(A・B・C・E・F・H)、⑩図版・図版説明・史料・略年表・構造図などを本文の左右に置き、わかり易くしたもの(I)などである。これらの工夫が、今後の改訂においても、より一層拡大することを期待したい。

しかし、教科書以上に大切なのは、教師が、これらの教科書を用いて、どのような授業を行うかである。授業は「教科書を教える」のではなく、「教科書で教える」ものである。せっかく近現代史重視の世界史Aを学習しても、前近代史の学習に時間を多く取られ、近現代史に十分な時間を当てることができず、現代史が積み残しになるようなことがあれば、近現代史に重点を置いた新教科を設けた意味がなくなってしまう。内容(1)において、どのように構造化されたテーマ(主題)学習を行うか、内容(2)において、どのような選択学習がふさわしいか、などが検討され、実践されなければならない。近現代史に重点を置く世界史Aの意義を活かすためには、前近代史の学習の展開が鍵になる。通史的な学習法を脱却して、テーマ(主題)的学習の積極的な導入が期待される。

注

- (1) 世界史Aの研究には、原田智仁「地理歴史科『世界史A』の認識論的考察」(『社会科研究』第40号, 1992年)、川口靖夫「地理歴史科『世界史A』と『主題学習』」(社会系教科教育研究会編『社会系教科教育の理論と実践』, 清水書院, 1995年)などがある。また、学習指導要領、及び同解説の引用は、『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』(実教出版, 1989年)によるが、本文中の表記は『解説』と略記した。
- (2) 世界史B教科書における文化圏学習については、有田嘉伸「世界史B教科書における文化圏学習の取り扱いについて」(『社会科研究』第50号, 1999年)などを参照。
- (3) 原田智仁「同上」, p. 19。なお、主題学習については、川口靖夫「同上」の他、有田嘉伸「高等学校世界史における『主題学習』について」(『長崎大学教育学部教科教育学研究報告』第28号, 1997年)を参照。
- (4) 原田智仁「同上」, p. 20
- (5) 分析した教科書とその略号は、以下の通りである。(A)世界史A－歴史と現代－(東京書籍)、(B)世界史A(実教出版)、(C)明解世界史A(三省堂)、(D)新世界史A(清水書院)、(E)明解世界史A・最新版(帝国書院)、(F)現代の世界史(山川出版社)、(G)要説世界史

- (山川出版社), (H) 世界史 A (一橋出版), (I) 高等学校世界史 A (第一学習社)
- (6) 川口靖夫「同上」, p. 218の表では, (A) の数字に誤りがあるので訂正した。
- (7) 川口靖夫「同上」, p. 218